

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 大学第二外国語としての日本語教授~教材製作を通して反省させられたこと~

doi:10.29714/TKJJ.199903.0002

淡江日本論叢, (8), 1999

作者/Author：孫寅華

頁數/Page：22-32

出版日期/Publication Date：1999/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199903.0002>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



大学第二外国語としての日本語教授

～教材製作を通して反省させられたこと～

淡江大学副教授

孫 寅華

はじめに

従来大学一学年で履修すべき第二外国語としては英語に限られていたが、「大学教育法令」の改正に伴い、どんな外国語でも選択可能となった。本校では1993年より各学部が独自に第二外国語を選ぶことになった。その当時の事前調査では予想以上の日本語ブームにより、45ものクラス（一クラスの定員60名）に相当する数の日本語履修者があることが分かったが、学生の数と教師の数とのバランスを考慮し、一年目は20クラスとすることに決定した。この膨大な学生に対し、一年間という短い期間にどのような教材を使用し、どのように教えるか、ということにつき慎重に協議した結果、本校独自に教材を製作することとなった。本稿において比較例として取り出したのは1997年と1998年版『核心日文』のことである。

1 教材作成について

1.1 核心日本語とは

核心日本語というのは日本語学科以外の第二外国語としての日本語のことを指している。本校（淡江）の場合は、週四時間（LL一時間を含む）年間ほぼ110時間の必修科目として設けられている。

1.2 学習目標

周知の通り、第二外国語としての日本語学習者にとって、その動機は実にさまざまであ

る。* 日本語がおもしろそう”とか、* 漢字があるから親しみを覚える”とか、* 将来日本へ留学する”とかということであろう。また中には、ただ単位を取るために履修する学生もかなりいる。このような学生すべてに対し、一年間を通じて最低限度習得しなければならない基礎的な日本語を身に付けさせるのが目標であり、それが教材を作るときのバロメーターでもある。

1.3 編集グループ及び編集経過

現場で教えている教師のほうが何よりも学生の学習目的や勉強方向についていちばん詳しいのではないかと考えられたので、日本語学科の専任教師が教材製作グループの中心となり、編集作業を開始した。資料収集やシラバスの決定、および内容分担などに半年を費やし、完全に本が出来上がるまでに一年間掛かり、1997年9月『核心日文』試用版が完成した。そして、一年間試用後、不評判だったため、いろいろな検討の上に立ち、編集グループが再出発することになった。1998年3月から、改訂版編集グループが発足し現場で教えている専任及び非常勤教師の意見要望を集約し、改定を始めたのである。98年版『核心日文』はすでに使用中である。良否については半分しか進んでいない段階では述べる事が出来ないので、この次の検討に譲りたい。

1.4 内容と構成

97年版も98年版も全部で20課から構成されている。学生がより短い時間に基礎的な日本語を身につけられるよう配慮し、〈文型中心〉の作成方針とした。そして、初級段階で学ぶ基本的な重要文型、単語のほか、学習者が出会う生活の場面において、聴解力がつくように配慮したうえ、98年版では各課には「単語」「文型」「練習」「会話」以外にテープに収録したミニ会話という項目も入れてある。また、主に〈です〉〈ます〉体で会話を作成したが、学習者がよく耳にするくだけた口語体の会話も取り入れてある。更に巻末には学習者の便宜を図って付録が付されている。20課を通して学習する単語数と文型数は、次の通りである。

表1

年	語彙数	文型数
97	1045	188
98	815	157

1045や815 という数はC.K ogden (1889～1957) (注1) のいう「話すために必要な最小限度の語彙850」には大差なく、初級の第一段階としては、まず妥当であろうと思われたが、学生の語彙能力や教室での会話の能力から見ると、必ずしもそうでないことが分かった。(2.1 参照)

2 97年版から98年版への検討

2.1 新出単語の配分について

各課を作る際、文型のみを重視したため、97年版では新出単語の各課の配分に偏りが生じる結果となった。例えば語彙のいちばん少ない第11課では20、いちばん多い20課では、107 と、アンバランスになっている。このため、実際に本を使用したとき、たいへん教えるにくいし、学生の学習意欲もそれにより落ちてしまうのが感じられた。一年間で教えることの出来る語彙数に限りがある状況では、初級段階で、日常生活に関係した生活語彙を無視し、特殊な語彙を必要以上に与えるのは無理が多いのではないかと思われた。

98年版ではこの点につき大幅に検討を加え、表1のように語彙数までも減らしたわけである。もう一つ注目すべきところは次の表2 (注2) に書いてあるように、最も変化したのは名詞である。それは膨大な語彙の量から特に特殊な名詞を削減したからである。

表2

品 詞 別	名	動	形	形 動	副	助	接 続	連 体	助 動	感 動	そ の注 他3
語97 彙	688	151	44	34	47	6	3	5	1	2	16
数98	481	134	45	14	34	18	7	4	7	4	67

(注4)

2.2 文字表記上の問題点

97年版では1課～10課までの「文型」では仮名と漢字仮名まじりの両方がついている。学習者が仮名に頼りすぎないように配慮し、11課からは漢字仮名まじりになっているが、漢字にルビを振っていないため、授業中学生が漢字の読み方を覚えるまで大変時間が掛かるし、興味もなくなるのではないかと教育現場で反省させられた。そのため、次の98年版では全面的に漢字仮名まじりの表記を取り入れると同時に、すべての漢字にルビをつけることにしたのである。

2.3 イラストなど教具教材の必要性

初級レベルの教科書には補助となる絵などを入れたほうが教えるときには役に立つ。例えば〈こたつ〉を教えるとき、日本独特の物なので絵を見せながら説明すると分かりやすい。その点、97年版教科書は文字ばかりで無味乾燥なものとなった。

3 指導上困惑したこと及び解決するための私見

3.1 文法上の疑問点

中国語には日本語の助詞に相当するものがほとんど無くて、中国語話者にとってはその習得が難しいのである。例えば、

1. 母はお弁当を作ってくれる。
2. 母がお弁当を作ってくれる。

中国語話者は〈は・が〉についてあまり意識しないので、その使い分けが分からない。例文1の〈母は〉の〈は〉は容易に理解されるのに、例文2のように〈母が〉の〈が〉になると、理解度が落ちてしまうのである。それ故、例文1、例文2のようなものにあたって初級段階の学習者をどう指導すればよいか、が実に頭を悩ます問題である。文法のみによる説明では学生に理解させることが出来ない。こんな時、場面設定し、会話を通じての説明が普通であるが、もっと良い方法はないものかと筆者は苦慮している。上例に対応する中国語は次のようなものであろう。

3. 母親為我做便當

4. 母親為我做便當

同じように見えるが、〈誰がお弁当を作ってくれますか〉という疑問文の答えは例2 しかない。もし、答えとしての例2 を省略していうと〈母です〉。これを中国語に訳すと、〈(是) 誰為你做便當?〉 〈(是) 母親 (為我做便當) 〉のように、省略も見える。ところが、これらはいずれも例1 にはあてはまらない。初級段階での日本語教育は実践的側面から考えると文法の代わりに適切な対訳を見だし、対照比較するのもひとつの方法であらうと思われる。また次の例を見てみよう。

5. 安ければたくさん買います。
6. 安かったらたくさん買います。
7. 安いならたくさん買います。

この三つの文のうち、5では〈安い〉という条件が大切であることに対して、7では、〈たくさん買います〉のほうが重要である。つまり、例文5は〈安い〉という条件が成立したら〈たくさん買う〉が可能である。例文7は〈安い〉というインフォメーションを受けて〈じゃ、たくさん買う〉というように〈買う〉に重点を置いている。ところが、例文6〈安かったら〉のような一回的、一時的な表現と〈安ければ〉のような論理的、習慣的な表現とをどう区別するか説明に困るところである。また、次の例を見てみよう。同じ条件の表現であるが、例7のように説明しては無理のようである。

8. 彼がそういうなら、そうしてください。

9. 彼がそういうなら、そうしてください。

中国語では〈上午・下午・昨晚...〉というような時間詞があるのに対し〈時制〉が見えない。このように、時制のない中国語話者にとって、〈なら〉にだけ焦点を置くのが極自然である。従って、いかに混乱を起こさないように時制の問題を導入するのが問題となってくる。もともと8は〈仮にそうであることなら、その通りにする〉というのに対して、9は〈もう発生したこと（言ったこと）の通りにする〉との意味であるが、学習者が正しくそれを把握し、理解しないと誤解につながることになる。また、同じ〈なら〉でも主題提起（提題）か判断か（相手の様子を見て判断する）という区別もなかなかつかないだろうと思う。

◎田中さんいないね。

田中さんなら図書館にいます。（提題）

◎暑いなら、ドアを開けてください。（判断）

3. 2 ~ない形について

10. きょうは寒くないです。きのうも寒くなかったです。（4課）

11. 寒くないのに、かぜをひいてしまいました。（11課）

12. あした休みですから、早く起きなくてもいいです。（11課）

13. 遠慮しないで、さくさん食べて。（13課）

（10～13の例は『核心日文』98年版に出ている文である）

ainiti

動詞〈起きる、遠慮する〉の未然形につく〈ない〉は、一般に助動詞と認められているが、形容詞〈寒い〉の連用形につく〈ない〉は助動詞ではなく、形容詞か形式形容詞であるとされている。その理由は、形容詞の場合は、

寒くはない。 寒くもない。

というように、形容詞と〈ない〉の間に〈は・も〉等のような助詞を介入することができるからである。時枝文法ではこの〈ない形〉を一括して助動詞としている。

『この「ない」を形容詞であるとする理由にはならない。意味は動詞につく時と同様に、打消であることに変わりはない。動詞につく場合には、「は」「も」等の助詞を次のようにして用いる。

流れはしない。 流れもしない。

即ち、動詞の場合には、「しない」が打消助動詞と同じ資格になるのである。』

(注5)

(以上便宜上一部の旧仮名遣いを現代仮名遣いに直した。)

〈ない形〉は時枝の助動詞であろうと、一般の形容詞であろうと、別に問題ないと思うが、ただし、教室で教えるとき、特に第二外国語としての学習者には、むしろ時枝説が理想的ではないだろうかと思う。ふだん、筆者は教室でよくこんな質問を受ける。

＊ 打ち消しの〈ない〉はどんな品詞ですか。 ”

説明をすると、

＊ なぜ同じ打ち消しの意味なのに助動詞と形容詞の二つの品詞があるのですか。 ”

確かにそうであろう。初級の学生の場合、混乱を避けるため、〈ない形〉を全部助動詞として教えたほうがよいのではないかと思う。つまり、形容詞の連用形につく〈ない〉と動詞の未然形につく〈ない〉を同一視し、助動詞と認めることにするのである。

3.3 形容詞の誤用から考えさせられること

形容詞は用言の一種であって、活用の語尾は〈かる・く・い・けれ〉と活用することである。また、形容詞そのものの語形変化としては動詞と違って、命令形を欠いている。動詞の語尾活用に比べて、それほど複雑ではないように見える。初級教室では学生がくく・

い・けれ〉という活用形を覚えるのにはあまり難しくないのである。が、母国語の影響もあり、次のような誤用がよく見られる。

14. *これはおもしろいの本です。

15. *バナナは嫌いの果物です。

16. *彼女はきれいありません。

中国語学新辞典によると『形容詞の主な用途は定語と状語にある。(略)定語の場合：「你是勇敢的人」(きみは勇敢な人だ。)状語の場合：「他們都勤勤懇懇地學習。」(かれらはみな勤勉に学習している。)…』(注6)

形容詞が名詞を修飾する場合は形容詞の後ろに〈的〉を付けるのが普通である。例：〈妹妹是漂亮的女生〉〈那是一本有趣的書〉〈他是快樂的人〉

例14はおそらく中国語に影響された典型的な誤用例であろう。つまり〈おもしろい〉と対応する中国語は〈有趣〉で、〈有趣〉は定語として名詞を修飾する場合〈的〉を付けるのが普通である。〈的〉は日本語の〈の〉に相当するものと思われるので、誤りがそこから生じたのであろう。例15・16は同じ〈の〉の誤用のほか、〈嫌い・きれい〉二つの形容動詞を形容詞に間違えた結果である。それも中国語の影響を受けたのではないかと言えよう。中国語ではこの二語も形容詞に属するからである。

外国語を学ぶとき、大なり小なり母国語に干渉されるのが事実だが、最小限にすべきである。上の例のように、教科書の翻訳も、『日華辞典』の説明も形容詞の場合はほとんど〈的〉をつけて、〈有趣的・紅的・乾淨的...〉のように表している。私見では、まず正しい中国語を取り入れ、〈有趣・紅・乾淨〉は本来形容詞であることをもう一度見直すべきだと考える。

次に、形容詞の連用形について見てみよう。主に動詞修飾の場合である。

17. 野菜が高くなりました。(10 課)

18. テレビの音を小さくしてください。(10 課)

19. わたしは朝早く起きられません。(17 課)

20. 髪の毛を短く切りました。(10 課)

(上の例はすべて97年版『核心日文』に出た文である。)

上の例はいずれも〈～く＋動詞〉の形を取っている。この日本語の〈形容詞＋動詞〉の用法は、飯豊（1972）の《用言的話部（文節）に連なり、副詞的修飾語となる》（注7）に相当するものである。つまり、〈深く反省する・大きく影響する・よく熟した〉というようなものは「形容詞の副詞的な用法」と認められている（注8）。

初級教室では〈形容詞のうしろに動詞が来たら、形容詞の語尾が「く」になる。〉と教えるのが普通であろう。それは、余計なことをたくさん言ったら、かえって分からなくなるという理由からである。17～20の例を見てみよう。それに対応する中国語はそれぞれ次のようなものである。

17a 變貴了 18a 弄小（聲） 19a 早起 20a 剪短

四つのうち、語順の違うものは19a だけに見える。中国語だから違う、と一言で納得できないだろう。よく考えると、17の〈高い〉は意味上〈結果〉となる（西尾・1972）。18はなにかのしかたによって（するの下位分類がある）変容、創造、分裂、位置の変化、抽象的变化という意味で、〈結果〉を表すのである（注9）。20の動詞〈切る〉は〈しかた〉の働きを有して、このしかたによって髪の毛が短くなるわけである。19の〈早い〉は動詞〈起きる〉その動作（〈しかた〉）の程度を修飾限定している働きを示していて、山田文法の〈程度副詞〉（注10）と橋本文法の〈程度の副詞〉（注11）とに相当する働きを持っているので〈程度〉の表現と認められよう。一方、中国語を見てみよう。先に述べたように、中国語では動詞を修飾する場合は〈状語〉と呼ぶ。19a の〈早〉は単音節形容詞で、朱德熙（1956）中国語形容詞分類のA類形容詞に属するのである。この状語としての単音節形容詞は動詞との結びつきが非常に厳密である。〈快炒・嚴禁・大笑・尖叫〉というようなものである。朱德熙はこれを〈一語〉と呼ぶ。19a の〈早起〉も〈一語〉と認められる。従って、19a は、修飾関係というよりもむしろひとつの詞であるように思われる。

上に述べたように、日本語形容詞の〈～く＋動詞〉の場合、単なる語尾の変化であるとは言えない。形容詞、動詞、そして、形容詞と動詞との組み合わせ等も考えなければならぬと思うのである。また、日本語と対応する中国語形容詞の分類や使い方等にも気をつけなければならない。初級教室ではこういった文法的な概念をいかに分かりやすく導入するかが問題となる。

終わりに

筆者が97・98年版『核心日文』教材制作を通して、よく考えさせられたのは、なぜみんなの力を合わせて作った教材が教室ではあまり効果が上がらないのか、ということである。学生の不勉強か、教材の不適切か、或いは他に原因があるのか。答えを見出せないまま、教室での学生の反応、勉強意欲、そして試験や練習をするときよく間違えやすい点等を一々ノートにして、今後の教材の改訂や教授法の見直しにあったて、ひとつの参考になしよと努めた。又、コンピューターの普及に伴って、教材をマルチ・メディア化する方法を考えなければならない。『核心日文』はこれからの改訂とともにマルチ・メディア教材制作の試みをしようとする予定している。

(本稿の一部は1998年 7月「台湾人日本語教師の本邦研修」、杏林大学で開かれたシンポジウムで口頭発表したものを加筆・修正し、まとめなおしたものである。)

注

1. Charles Kay Ogden(1889~1957) 「Basic English」を創案
2. 孫寅華 1998.12 高中第二外語教學檢討會 「第二外語教材規劃製作之檢討—以淡江大學『核心日文』為例」を引用
3. 慣用語、連語など
4. 97年版の語彙総数から地名、人名、常用助詞で・に・を・はなど除き、実際語彙数は997である。
5. 時枝誠記 『日本文法』口語篇 1984 第8刷 p164
6. 中国語学研究会編 『中国語学新辞典』 昭和54年 5版 p32
7. 『品詞別・日本文法講座・形容詞・形容動詞』 1972 p9
8. 孫寅華 『形容詞副詞的な用法の一考察』 1987
9. 前掲
10. 単に程度を表すものにして、専ら他の属性を表す副詞又は用言に属して、その属性の程度を示すために用いられるもの(ちょっと、すこし、等)
11. 程度を詳しく示す。

参考文献

1. 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所報告44 秀英出版
1972年
2. 西尾寅弥『動詞・形容詞問題語用例集』 国立国語研究所資料集7 秀英出版 1971年
3. 金田一春彦『日本語動詞のアスペクト』 麦書房 1976年
4. 宮島達夫『動詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所報告43 秀英出版
1972年
5. 草薙裕『日本語はおもしろい』 講談社 1991年
6. 松村明他『講座日本語の文法』 シンポジウム時枝文法 明治書院 1968年
7. 時枝誠記『日本文法・口語篇』 岩波全書 第8刷 1984年
8. 山田孝雄『日本文法学概論』 宝文館 1936年
9. 松下大三郎『標準日本語口語法』 中分館 1930年
10. 日本語学「特集・形容詞・形容動詞」第4巻第3号 明治書院 1985年
11. 中川正之「日本語と中国語の対照研究－日中語対照研究会の紹介を兼ねて－」
日本語学 1985年 vol.4
12. 佐治圭三『日本語の表現の研究』 ひつじ書房 1996年初版3刷
13. 朱徳熙「現代漢語形容詞研究『現代漢語語法研究』 3～41頁所収」 商務印書館
1980年
14. 丁声樹『現代漢語語法講話』 商務印書館 1962年
15. 王了一『中国語法綱要』 開明書店 1946年
16. 陳伯陶『日本語修辭法』 大新書局 1998年再版
17. 吉田妙子「連体修飾における形容詞のテ形修飾とイ形修飾」 台湾日本語文学報10
1997年